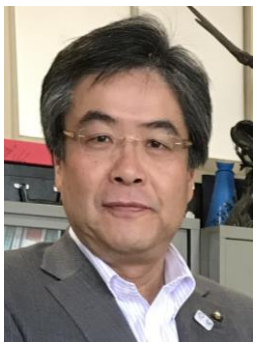
小泉としひろ後援会報

小諸ぷらいど通信

VOL.3
2018.6.2発行

編集・発行　小泉としひろ後援会事務所　〒384－0808　小諸市御影新田2529－1　TEL0267－23－8788



これからの小諸市に必要なこと

小諸市長
小　泉　俊　博

早いもので市長に就任してから、任期の半分が終了しました。お陰様をもちまして忙しくも大変充実した日々を送っております。

これからも小諸市の発展のため誠心誠意、力を尽くしてまりますので、後援会の皆さまにはご理解ご協力をお願いいたします。

将来を見据えた取り組み

高度経済成長期には中心市街地は賑わいましたが、その後は、郊外に向けて人も店舗も住宅も移動し、公共投資も積極的に行なわれた“拡大型社会”となりました。他方で自家用車が増えたことにより公共交通は衰退していきました。

しかし、平成の中頃から我が国では急速な少子高齢化・人口減少の時代を迎え、小諸市も平成12年の人口４万６千人をピークに人口減少に転じ、今後は生産人口の減少に伴う税収減による予算規模の縮小を余儀なくされていきます。

このような時代背景の中、都市機能をまちの中心部に集約し、郊外の生活拠点を充実させ、それぞれの拠点を公共交通網で結ぶことにより生活の利便性をはかるという「多極ネットワーク型コンパクトシティ」の考え方が生まれました。全国の自治体では実に半数以上が目前に迫る時代に備え、コンパクトシティに取り組み、または具体的に検討していることが新聞報道されています。

小諸市においては市役所を新築し、その周辺に図書館・市民交流センターや病院を集約しましたが、さらに公共施設の集約化（高齢者福祉センター、病児病後児保育、デマンドタクシーのターミナル、公共駐車場などを検討中）を行い、商業施設（スーパーマーケット）を併設する複合型中心拠点施設の整備を行うべく取り組んでいます。

既存の金融機関などとあわせこれらの都市機能の集約化により、市内全域の多世代の市民が利用でき、一度の外出で用事が足せる、より利便性の高いまちづくりを目指しています（詳細は『小諸ぷらいど通信Vol.２』をご覧ください）。

さらに市ではコンパクトシティの取り組みと並行して急激な人口減少を抑制し、若者世代の定住を促進するための対策も行わなければなりません。

―昨年策定された第５次基本構想、第10次基本計画に掲げた「東南部地区の開発」を具体化すべく、住宅建設の促進のためのインフラ整備、働く場を確保するための産業団地建設に向けた調査費などを今年度当初予算に盛り込み、実施していきます。

この他にも小諸市が直面する課題は枚挙に暇がありません。小諸市が持続可能な都市でありつづけるために、そして市民がいつまでも健康で健やかに過ごせる安心安全なまちであり続けるために、将来を見据え“今”やらなければならないことを着実に実行してまいります。

「こもろを褒めよう運動」の推進

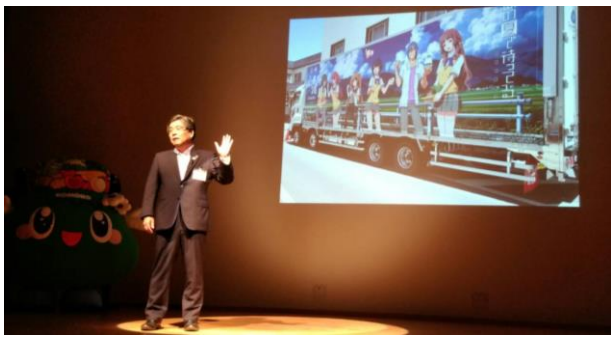
市長就任以来、大小様々な団体から講演を依頼され、２年間で十数回行っています。ここ1年ほどはテーマが自由な場合は「小諸がイチバン！」と題して話をしています。小諸には先人たちが遺してくれた歴史、文化、豊かな自然など沢山の宝があります。しかし、現代に生きる私たちはどうしても“隣の芝生”が青く見えてしまう。小諸の市民が当たり前と思っていることが実はどんなに素晴らしいのか、誇れるものなのかを紹介しています。

その中で、参加した人には「こもろを褒める運動」をお願いしています。子育てに例えるならば、どんなに素晴らしい才能や個性があっても、毎日のように親から「おまえはダメだ！」「となりの〇〇ちゃんは賢い」と言われ続けたとしたら、いじけてしまうし、才能を開花することはできないでしょう。

これは小諸市についても同じではないでしょうか。

例えば高校生まで暮らし、就職や学業で小諸市を離れた子どもが、就職や家庭をもつ時に、親から「ダメだ！」と言われた小諸市に果たして帰る気持ちになるでしょうか。郷土愛をもつことは難しいのではないでしょうか。

そんなことがないよう自分の子どもや孫はもちろん、周囲の人に対しても小諸の良いところ、誇れるところを積極的に話していきましょう！と「こもろを褒める運動」をお願いしています。後援会の皆さまにもぜひご自身の「小諸がイチバン！」を見つけてご協力いただきたいと思います。



小泉市政の二年目を振り返る

Topic1
注目される小諸市の学校給食

近隣自治体がセンター給食へと移行する中、小諸市では自校給食を堅持。

さらに栄養士、調理員、食材提供農家、子どもたちそれぞれの努力により、年間一人当たりの残食量が全国平均で８.１ｋｇのところ、小諸市では０.８ｋｇとなり、注目を集めている。

ＰＲ動画の影響もあり、７月には台湾の宜蘭県から、教育関係者による視察も予定されている。

Topic2
ネーミングライツ契約

自主財源の確保により安定的な施設の管理・運営を行い、市民サービスの向上や地域経済の活性化に役立てることを目的に南城公園野球場の命名権の売却を行った。㈱大栄製作所様のご協力により５年間のパートナー契約を行い、新たな名称は「大栄小諸球場」に決定した。

市では命名権料を利用して老朽化した同球場のダグアウトの雨漏り補修工事などを行う計画。

Topic3
企業立地の推進

雇用の場の創出などを促進するため企業立地を推進。旧ＶＩＯ跡地にＪＲバス関東(株)小諸支店を、旧日清ファルマ跡地にホクト(株)を誘致する。それぞれ６月から事業開始予定。

ＪＲバスの移転新築により、新たに首都圏につながる玄関口ができたことになり、観光客等の増加が期待される。また、シイタケ栽培の拠点として工場を建設したホクトに地元雇用が創出された。

Topic 4
こもろキャンパス構想

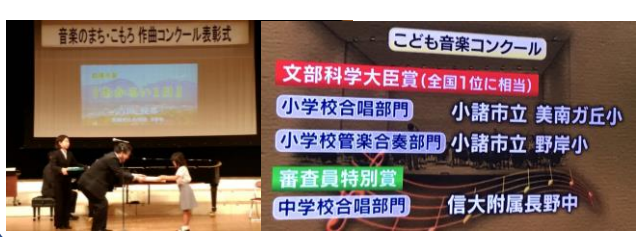
数年前から小諸市でフィールドワークしている慶応大学ゼミが主催し、首都圏５大学参加した「こもろ映画祭」が開催され盛況だった。また、日本デザイナー学院の学生１５０人が参加して行われた「動物イラストコンテスト」で最優秀賞の作品を動物園で利活用。

今後も他の大学・専門学校などの若者たちの学びの場としての関係を大切にし、連携強化をはかり、小諸市の発展につなげていきたい。

Topic 5
音楽のまち・こもろ推進

「音楽のまち・こもろ」を提唱し、作曲コンクールを開催した。小・中・高校生から３４作品の応募があり、最優秀賞の小学３年生が作曲した「あかるい１日」を夕方の防災無線で採用した。今後も作曲コンクールを継続して開催する予定。

また、野岸小管楽部と美南ガ丘小合唱部がこども音楽コンクールで文部科学大臣賞（全国１位）をダブル受賞する快挙を成し遂げた。記念コンサートでは多くの市民に感動を与えた。



Topic 6
小諸駅のバリアフリー化

長年多くの利用者から強い要望があった小諸駅のバリアフリー化について、市とＪＲ東日本、しなの鉄道が協同してエレベーター３基を設置した（３月より供用開始）。

あわせて老朽化した跨線橋（こせんきょう）の改修工事も行い、駅の利便性が格段に向上した。

Topic 7
高地トレのさらなる推進

小諸市エリア高地トレーニング推進協議会により実業団、大学の陸上部などの誘致活動を展開。昨年度は１５００人以上の誘客を実現した。先月にはトライアスロン・アメリカチームが五輪事前合宿候補地として視察に訪れる。

この他、市民のスポーツ振興、健康増進のため、天池総合グランドに全天候型４００ｍトラックや人工芝の多目的グランドの整備を行った。

Topic 8
稼げる農業を目指して

中山間地の多い小諸市の農業の生き残りをかけて、稼げる農業の実現のためのブランド化を推進。大阪市場などへのトップセールスはもちろん、土壌微生物に着目した「KOMORO　AGRI　SHIFT（こもろアグリシフト）」プロジェクトに着手。

若手農業者などを中心に研究・協議を重ね、小諸の元気な土、栽培基準となる「小諸基準」の策定を目指す。